

地図を見た西洋人らがその地名をどうやって読めたのか疑問には思わないだろうか？ 漢字で細かく書き込まれた地名を、当時の西洋人はいったいどうやって解読したのか？ だが、シーボルトが行ったように外国語に翻訳をしなければならなかったはずだ。

赤水図を外国人にも理解できるように翻訳して世界へと広がる橋渡し役を務めたのが、オランダ生まれの外科医にして、1779年から1784年ま



黒船に乗り、日本に開国を迫ったペリー。赤水図を持っていったという。



太平洋戦争中、地図を見ながら説明を受けるマッカーサー(手前)。その隣はルーズベルト大統領。

で3度にわたって長崎出島にあったオランダ商館長(カヒタン)を務めたサイーク・ティチングという男だった。そして彼こそ、日本にやってきたフリーメイソンとして記録が残されている最初の人物なのだ。

赤水図は、ティチングが日本に赴任するのとほぼ同時期に刊行されている。日本着任後すぐにそのすばらしさに気がついたティチングは、この地図をどうにかしてオランダ語に訳せないものかと考えた。

ティチングは、赤水図に書かれている地名の脇に地方ごとに分けて番号をふっていった。そして長崎にいる通詞の助けを借りながら、日本語の地名の読みをオランダ語へと移し、番号ごとに並べた一覧表を作り上げた。オランダ



長崎市のグラバー園にあるフリーメイソンのシンボルが刻まれた門。幕末、長崎に定着したフリーメイソンの人々が設置し、のちにグラバー園に移設されたもの。

ダ語化できた地名の数は4000を超えた。オランダ語にされたティチングの赤水図地名表は、その後ドイツ人言語学者の手に渡り、現在は大英図書館に収められている。

このように、ティチングの血のじむような努力で作られた外国語の地名一覧と詳細な赤水図がセットとなって海外へと流れていった。翻訳版赤水図の登場によって、それまで謎だった日本という国の姿が海外により広く、正確に知られるようになったのである。

嘉永6(1853)年に黒船に乗って浦賀沖に現れ、日本に開国を迫ったマシュー・ペリーもまた赤水図を持っていた、と見られている。

日本の近代化に関わったふたりのフリーメイソン

日本という国が近代化し今の形になるまでに、海外から押し寄せる2度の大きな荒波を乗り越える必要があった。

1度目の大きな荒波は明治維新。上記のペリーの黒船艦隊によって迫られた開国であった。2度目は、太平洋戦争における敗戦。それまで帝国主義の道を行っていた日本は、ダグラス・マッカーサーが率いるGHQ(連合国軍総司令部)によって国家を換骨奪胎され、より近代的な民主国家へと脱皮す

る必要があった。

そして一部ではよく知られていることだが、1度目の脱皮を迫ったペリーも、2度目の換骨奪胎を強行したマッカーサーのどちらもまた、フリーメイソンであったのだ。こう考えると、世界で最初に日本へと上陸してきたフリーメイソンのティチングが行った日本地図・赤水図の翻訳作業もまた、これら後輩のフリーメイソンたちがやがて行うであろう日本の開国や日本近代化を速やかに進めるための準備作業となっていた、ともいえるかもしれない。

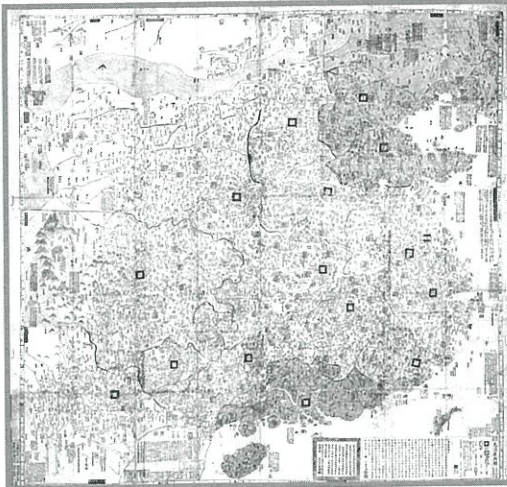
だが、このように書くこと「やはり日本は、江戸時代半ばからすでにフリーメイソンによって虎視眈々と日本征服を狙われており、日本の内情を探るために地図を盗みだし、スパイまで送り込まれていたのだ」などといった大きな勘違いを起す人が出てくるかと思う。しかし、それはありえない。

フリーメイソンには、世界全体をまとめる中央政府のようなものはいっさい存在しない。だから、オランダのフリーメイソンとアメリカのフリーメイソンがタッグを組んで何世紀にもわたって同じ陰謀をめぐらすなどということとは極めて難しい。本来なら「か国にひとつしかないはずのフリーメイソンのグランドロッジが、アメリカの場合



赤水が晩年に手がけた世界地図「地球万国山海輿地全図」(高萩市教育委員会提供)。

1785年に作られた「大清広輿図」。山岳や河川などが色分けされ、当時の中国の国土が詳細に示されている(高萩市教育委員会提供)。



謀のもとにまとめられるわけがない。また筆者

は各州にひとつずつ存在してしまっている。グランドロッジごとに独立した権限が保証されているので、州をまたいでの陰謀ということすら難しいのだ。アメリカ全体のグランドロッジをまとめた統一グランドロッジを作ろうという動きも過去何回も行われた。だが、結局話がまとめられないまま各州ごとにバラバラな活動が続いている。アメリカ国内ですらひとつに統合できないような組織が、世界全体でひとつの陰

者は日本のフリーメイソンのウォッチングを長らく続けているが、内紛や足の引つ張り合いといったことが、これほど激しい組織も珍しいと思っ。男しかない組織なので、男同士の妬み合いのような、聞いていてウンザリする話も多い。

世界地図まで作製した晩年の赤水

では、なぜティチングやペリー、マ

ッカーサーといった有能な人々が、かつてはフリーメイソンに集っていたのか？ それは、彼らのように7つの海を股にかけて世界で飛躍し活躍していく男たちにとって、友愛の仲間が全世界に広がっているフリーメイソンは、大変使い勝手のよい組織であったからだ。一流の男らがこぞって入会するほどフリーメイソンは、少なくとも昔は、魅力的な組織ではあったということなのである。

「フリーメイソンは世界征服を企む秘密結社」といっておき話は、実際のフリーメイソンと付き合ったことがない方々が抱く淡い夢に過ぎないだろう。最後に赤水の晩年について紹介しておきたい。念願だった詳細な日本地図を完成させた赤水は、続いて中国地図や世界地図の作製を試みている。天明3(1783)年に縦横が180センチを超える巨大な「大清広輿図」を完成させ、天明5(1785)年には「改正地球万国全図」を作り上げ、日本、中国、世界の姿を一望のもとに眺められるようにしたのだ。

た赤水であったが、彼の腕を見込んだ水戸藩からは、水戸光圀の命によって延々と続けられていた大事業「大日本史」作成のうちの「地理志」編集という重責も命じられることになった。老体にむち打ちながら81歳という高齢まで約20年間にわたる江戸での仕事を勤め上げた赤水は、以後故郷の赤浜へと戻って妻とふたりで暮らし、享和元(1801)年、地元で永眠した享年85だった。

死後はその業績が忘れられるままとなっていた赤水だったが、1992年に地元で長久保赤水顕彰会が発足した。展示会が開かれたり、マンガによる伝記が出版されたりといった再評価が始まり、2020年には赤水図をはじめとする赤水関連資料693点が国の重要文化財に指定された。2012年11月には、JR高萩駅前に有志の手によって赤水の銅像が建てられ、袷姿に正装した赤水に今ではだれでも会えるようになっていく。

【参考文献】
●朝日新聞茨城版連載「赤水さん 地図に広がるいきいき人生」(2020年4月2日~6月18日)
●「鎖国時代 海を渡った日本図」(小林茂他編、大阪大学出版会、2019年)
●「高萩市文化誌ゆずりは」(2006年11月)
●「日本地図史」(金田章裕・上杉和央、吉川弘文館、2012年)
●「マンガ長久保赤水物語」(長久保赤水顕彰会、2018年)